

# 冬海

横川俊夫（高9回）



●よこかわ・としお  
昭和13年、飯田市生まれ。東京  
教育大学仏文科卒業後、埼玉県  
立高校の英語教師に。米ミネソ  
タ大学へ国費留学。与野高校、  
桶川西高校で校長を歴任。埼玉  
文学賞のほかに、山曆新樹賞受  
賞。『山曆』同人。俳人協会会員。

観世音抱きて冬の海に立つ

寒風や火種となりて吹かれゆく

山河父母なき大雪となりにけり

冬に入る病院裏の雜木林

情念のごとく躊躇の返り花

海鳴りのかすかにありて雪降れり

大き瞳をして雪の日の別れかな

飢餓海峡命がけなり抜手切る

指呼すれば冬の木立や日本海

初日の出俺は大地に立つてゐる

一日一生木枯の吹き荒ぶ

人はみな往きて還へらず鰐雲

俺に愚痴を言うな激しき雪が好き

次の生また次の生の冬の道

生きている限りたかひ遠雪嶺

大きな出俺は大地に立つてゐる

賀状来る玄海灘をひた越へて

身に刺さる管幾本や冬を病む

男らのブルーシートに冬の雨

バラライカ奏で国後霧深し

## 十七文字に自分のすべてを

俳句をはじめたのは54歳の時である。遅い出発であった。そんなころ、

海に出て木枯帰るところなし 詩子

に出会った。強烈な衝撃を受けた。頭上を木枯しのびゆうびゅうと吹き過ぎてゆく音を聞いているようだつた。そしてひたすら生きてきた人生を感じた。定型の五七五という僅か十七文字でこれだけのことが言えるのだ。この短い文芸の中に、自分の全てをぶち込んでみたいと思つた。自分のありつたけを表現できるなら、詩でも短歌でも俳句でも何でもよかつた。

向日葵や信長の首切り落とす 春樹

凄い句である。向日葵には自分もそう感じことがある。俺だってできる、とも思った。

## 初の応募作品が正賞に

それから半年ほどで気に入った句が20句ほどできた。妻に見せたら、じつと見ていてから「どこかへ応募してみたら」と言つた。自分はあまり自信がなかつたが、ためしにと思い、埼玉新聞主催の埼玉文学賞に出してみた。

10月31日(日) 1994年(平成6年)  
埼玉新聞 THE SAITAMA SHIMBUN 第1・20号

小説 吉野さん(東京) 横川さん(鴻巣)  
俳句 筑波笠井(宇都宮) 柳坪(宇都宮)  
2部門で正賞

受賞者発表式

彩の国あさひ銀行 第25回埼玉文学賞

小説部門 受賞者: 吉野さん(東京) 横川さん(鴻巣)  
正賞: 吉野さん(東京) 横川さん(鴻巣)  
優秀賞: 篠原さん(宇都宮) 佐藤さん(宇都宮)  
佳作賞: 田中さん(宇都宮) 佐々木さん(宇都宮)  
詩部門 受賞者: 筑波笠井(宇都宮) 柳坪(宇都宮)  
正賞: 筑波笠井(宇都宮) 柳坪(宇都宮)  
優秀賞: 佐藤さん(宇都宮) 佐々木さん(宇都宮)  
佳作賞: 田中さん(宇都宮) 佐々木さん(宇都宮)

埼玉文学賞受賞を伝える埼玉新聞  
(1994年10月31日付1面)

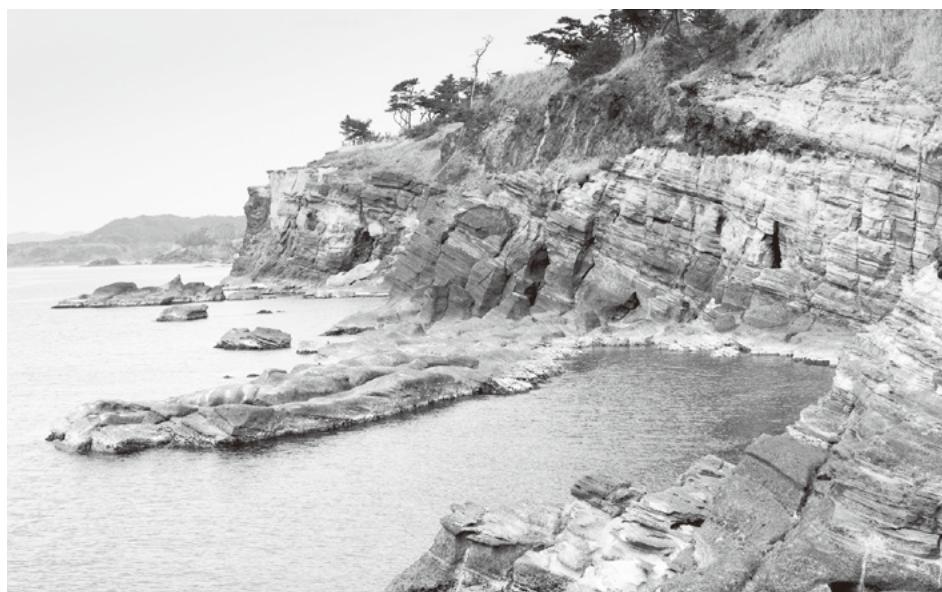
応募したことを忘れかけていた頃、突然、新聞社から電話があった。

電話は、たまたま出張先の仙台の宿へかかつてきたり。校長仲間3人で宿で夕食をとつていた。電話してきた新聞社の文化部次長さんは、俳句部門の正賞に決まつたと言つた。選者は金子兜太、松本旭、星野紗一の3氏であつた。帰校してすぐ新聞社の取材を受けた。記事は大きく出た。その日から当分の間はお祝いの電話で、校長室の電話は鳴りっぱなしの状態。花束や祝電が次々と届く。音信の途絶えていた教え子たちからも連絡があつたり。新聞の反響はすごいものであつた。

授賞式や受賞パーティーは選者の先生方、地元の代議士、県知事、県教育長、県議さん、市長さん、文化人の方々、歴代の受賞者たちも加わつて華やかであつた。私は妻と一緒に出席した。受賞者たちを代表して私が謝辞を述べた。それがまた記事になつて写真付きで掲載された。その後も勤務先の先生方、PTAの役員の皆様、俳句仲間の会など受賞騒ぎはしばらく続いた。もうあのよだな経験は、私の人生にはないだろう。

## 生と死は紙一重

さて『冬海』と題する一連の句（20句）は、



ヤセの断崖（石川県志賀町）

## 観世音抱きて冬の海に立つ 俊夫

ではじまつている。

冬海は日本海だと思いますが、あの観世音の句は、どこですか、と尋ねられたことが何度もあつた。どうもこの句から自殺の句いを感じたようだ。

私は苦笑して答えなかつたが、本当は冬の海を眼前にして生きる勇気を奮い立たせていたのである。この句は

能登の富来町（現志賀町）の「ヤセの断崖」へ行つた時の句である。そこは自殺の名所として有名である。まあ

考えてみればどちらでもいい。生と死は紙一重である。私は能登が好きで何度も出かけた。金沢まで行くと能

登へ回ることが多かつた。

校長仲間で今は北海道に住んでいるM氏と2人で富来まで行き、そこの民宿に泊まり、目前の海を肴にして一晩語り明かしたこともある。

「ヤセの断崖」と言えば、松本清張の『ゼロの焦点』で、登場人物として主要な女性があの断崖の海の果てに消えてゆくところで小説は終わっている。断崖に立つて下を見ると確かに足がすくむ。

## 横川氏は日本を代表する一流の俳人

横川俊夫氏は、私の高校以来の親友である。年賀状では毎年、海、山、川の奇麗なカラー写真（4×7センチ）と共に、透明かつ鮮烈で、時には激しく厳しく運命的で、時には清冽かつ静謐で心温まる句が、年頭に届く。なかなか良い句を詠むーと私は感動する。

ところで2019年4月13日の『産経新聞』（12版、18面）には、5人の俳人の冒頭に、横川氏の俳句が載せられている。「生かされし命と思ふ初山河」「生きものの動く気配や春の闇」など10句あり、評者の寸評に「日々高い意識でこだわりを持って作句に励み、キラリと光る句を詠んでいる。新鮮な感動を届けてくれる」とある。どうも私の不明を恥じるばかりであるが、横川氏は日本を代表する一流の俳人であるようだ。その氏が私たつての願いを聞き入れてくれて本誌への寄稿となつた。感謝の気持ちで一杯である。

筑波大学名誉教授

元筑波学院大学学長

三石 善吉（高9回）